HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	献辞
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學　經濟學研究, 30(4), 1-3
Issue Date	1981-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31518
Type	bulletin (article)
File Information	30(4)_P1-3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

献　　辞

早川教授は，昭和56年4月1日，停年退官をむかえられる。教授は経済学部創基いらい35年もの長いあいだ，学部のためにつくされ，大学のためにつくされた。その大いなる功績に謝することばを，われわれは知らない。そこでわれら一同，ここに，それぞれ研究の一端を集録して，教授退官の記念とし，ささやかながら謝意のあかしとするほかはないであろう。

教授は，昭和16年，東京商科大学（現・一橋大学）を卒業し，内閣企画院嘱託，一橋大学経済研究所研究員をへて，昭和22年，北海道大学法文学部経済学科の講師として着任された。以来，一貫して経済原論を担当し，教壇にたたれては学生の畏敬を集め，後進の指導においては若い研究者のまえに巨峰としてそびえた。その名講義は学生を魅了し，いくたの有為な人材を社会に送りだしている。そのすぐれた学識は若い研究者を育て，門下生のなかから，内外の経済学界の第一線で活躍している多くのエコノミストを輩出せしめている。

教授は，東京商科大学在学時代，故杉本栄一教授のもとで，当時出版されて間もないケインズの「一般理論」を学び，以後，ケインズ経済学に基礎をおく長期動学理論の展開に力をそそいだ。そして当時，世界の学界で中心的テーマとなっていたケインズ的なマクロ経済学上のいくつかの論点，すなわち集計問題，安定条件，時間要素の導入などをとりあげ，すぐれた研究成果を精力的に発表した。これらは集約されて，処女作「経済変動理論への途」(昭和26年）となる。つづいて，教授は景気変動論の学史上，ケインズとは対照的な流れを形成しているシュピートホフ，ハイエクなどの研究から多くの有意義なアイディアをひきだし，ユニークな構想にもとづく独特のモデルを開拓した。この方向での研究成果は，「経済変動理論」（昭和33年）に結実するに至る。いずれの著作も，当時のこの分野における最高水準をゆくも

のであって，景気変動論における早川モデルとして，今日もわが国経済学界の主要財産の一つに数えられている。

景気変動論上の未解決の諸問題をめぐる教授の研究は，その後も絶えることなくつづけられている。しかしこれまでの理論研究を一転して日本経済分析に適用するに及んで，教授の論理展開は一段と精彩を帯び，説得力をもつことになった。「戦後日本経済と景気理論」（昭和47年）は，早川モデルを昭和40年代前半までの日本経済における景気循環過程と高度成長経路に適用したものであって，数ある類書のなかで学界から高い評価をうけているものである。さらに教授は，昭和40年代後半，日本経済が低成長経路への移行をよぎなくされるや，低成長とインフレ障壁，低成長と過剰能力，低成長下における企業の投資行動などに関する労作をつぎつぎと発表されている。これら一連のペーパーが一本に完結する日もそう遠いことではないだろう。他方において近年，教授の学問的関心は地域経済論，なかんずく北海道経済論，あるいは地域開発・計画論にも及び，北海道の産業構造や発展戦略などの諸問題についての積極的な政策提言を試みておられる。これら応用領域における教授の業績が，学界のみならず，地域社会にも多くの貢献をなしていることは，周知のとおりである。

わが国の理論経済学の分野で，教授はつねに第一人者の地位を占められ，理論計量経済学会の理事をほぼ20年にわたってつとめられた。学内の行政面でも，教授の貢献は大きく，昭和40年から42年までの経済学部長時代に，当時の北大当局が解決に苦慮していた新寮規則問題の取りまとめ役として活躍し，行政手腕の片鱗をのぞかせた。その後，附属図書館長にも推挙されるなど，学内の運営一般においても重要なポストを歴任されている。一方，学外においても，昭和43年以来，北海道総合開発委員会の委員をつとめているほか，同年から49年までの6年間，北海道地方労働委員会の委員として労資関係の安定につくされた。また44年以来，北海道地方最低賃金審議会委員，51年から現在にいたるまで，北海道開発審議会委員，北海道建設審議会委員，さらに54年以降は，日本国有鉄道北海道総局評議会評議員

など，数々の要職を兼務されている。

かえりみれば，早川教授は，少壮気鋭の学者として北大赴任の当初より30有余年，温厚黙然，孜々として研究一筋に明けくれてこられた。学問の大道をまっしぐらに進まれる教授の姿は，その清廉な人格とあいまって，研究者の範としてわれら同僚・後輩の畏敬の的であった。しかしながら，ひとたび言を発するや，理路整然，その説得的レトリクの見事さは，われわれを圧倒し，片時も崩れることのない教授の温雅な風貌とともに，われら凡俗の卑小さを反省させずにはおかないのであった。

その教授がいま，学園を去られる。北大経済学部を今日あらしめた教授の功績，そしてこの学部に現代経済学の理論的伝統を築きあげられた御努力を思うとき，われら一同，教授が北大経済学部に残された遺産をまもり，伝統の灯りをいっそう大ならしめようとの決意をかためるのみである。

昭和56年3月

北海道大学経済学部長　石　垣　博　美